

「言い出しべえ」の弁

財団設立準備室代表 水谷 慶 一

私が奥美濃の地をはじめ訪れたのは一九五九年、もう半世紀も昔のことである。北陸の金沢から当時の国鉄バスに乗って朝九時から延々八時間、途中、運転手も車掌もみな交代して終始、バスに乗っていたのは私ただ一人だった。終点の美濃白鳥に着くと夕日が越前の山々の背後の空を真っ赤に染めていたのを今でも記憶している。

当時、私はNHKでテレビの駆け出しディレクターだったが、まだビデオなどの無い頃で放送はすべてナマだったから、一週間に徹夜を三日も繰り返す毎日を送っていた。それだけに、このバス旅行の途中に見た風景はなおのこと私を感動させずにはおかなかった。

合掌造りの民家が点在する白川郷、それを前景にした白山の峰々、また広大な御母衣（みほろ）ダム建設現場、そして莊川と長良川の清流、見るものすべてが、せまってくるしいTVスタジオの日常を忘れさせた。以来、NHKに三十五年間、そして大学教師の十五年を経て、ようやく私はかつての記憶の場所へと還ろうとしている。

「帰リナン、イザ」である。しかしながら今、私は五世紀のシナの詩人（陶淵明）を悠長に気取どってなどいられない。事態は「田園マサニ蕪（ア）レナントス」どころではなく、もっと深刻なのだ。環境汚染におびえ、グローバルな市場主義の荒波に翻弄されつづけた田園はまさに瀕死の状態といつてよく、そして何より残念でならないのは、人々の顔から誇りと生気が失われたことである。今や中央からの補助金を乞うのに汲々としているかのように私の眼には映る。

もともと私は大阪の中心、船場の商家に生まれ育った。しかし、美濃はまた父祖の地でもある。私の父の家は美濃の今尾（現、平田町）にあった小藩の士族であり、また上記のバス旅行がきっかけとなって、私は奥美濃に生まれた妻ともめぐりあった。美濃と私は不思議な縁で結ばれていると言わざるを得ない。

つまり私は美濃にとって半分「他所者」なのである。しかし他所者であるからこそ見えることもあり、思い付くこともある。それをなんとか役立ててみたい。NHK退職後、私は大で教えるかたわら約二〇年間、生涯教育にも携わってきた。それまでテレビを通してやってきたことを、次には人々に直接、向き合うかたちでやってみたのである。その経験を地域教育の現場でも生かすことができなだろうか。「帰るべき田園」の再生にむけて一臂の力をかせないだろうか。これが今回の発案に至った経緯である。

大阪弁で発案者のことを「言い出しべえ」という。言い出しべえには、それなりの責任がともなう。格別の資産ももたず、一介の年金生活者にしかすぎない私に、はたしてこの重責をになうことができるだろうか？ 一流企業でトップの実務経験をもつ年来の親友が友情

をこめて私の無謀を危ぶむ声が入らぬわけではない。

しかしいっぽう岐阜県にかぎらず全国には同じような古民家保存の問題に頭をかかえる例はすくなくないと聞く。私は今回の企てが、この難題を解く一つのモデルケースになり得ると考えている。そして私はこれをお役所の主導によるのではなく民間の手で是非ともやり遂げたいと願う。かつて柳田國男の民俗学や柳宗悦の民芸運動がそうであったように。そして将来は全国各地に同じモデルの「生きた博物館」が生まれ、そのネットワークによって相互の交流が活発になれば、それこそが地域活性化の原動力になり得るのではないだろうか。

たとえ前途の路はけわしくとも、さいわい梅原猛氏ほかの諸先達の応援を得て、この私の生涯最後のプロジェクトが実を結べば本望である。あらためて諸兄弟の賛同を冀ってやまない。

(二〇〇七年九月記)